

## 〈研究ノート〉

田村（佐藤）俊子の中国時代の年譜  
(1938年12月～1942年5月)

—新資料をもとに

朱 彩 雲

## はじめに

本稿は田村（佐藤）俊子<sup>(1)</sup>（1884年4月～1945年4月）が中国に渡った1938年12月から、上海で中国語婦人雑誌『女聲』を創刊しはじめた1942年5月までの時期を範囲として、年譜を整理するものである。この時期を中国時代前期<sup>(2)</sup>と定義する。

田村俊子は、日本女性文学史において「明治期を代表する女性作家にはすでに樋口一葉がいるが、本格的な職業作家として文壇的に成功したのは田村俊子が初めてであり」<sup>(3)</sup>、『『新潮』や『中央公論』で三度も特集を組まれるほど、一時代を風靡した〈田村俊子の時代〉を確立した」<sup>(4)</sup>という重要な人物だと言われている。18年間の北米滞在を終え、日中戦争期に中国で中国語婦人雑誌『女聲』を主宰していた。日中が敵対的な関係にあった厳しい時代にもかかわらず、俊子が亡くなった後、東本願寺上海別院で行われた葬儀には、彼女の死を悼んで号泣する中国女性が列を作ったという<sup>(5)</sup>。俊子がなぜ、いかにして中国で女性啓蒙活動に邁進したのか、その経緯はどのようなものだったか等、俊子の中

(1) 本稿では先行研究で一般的に使われている「田村俊子」を使い、略称としては、田村や佐藤という苗字を用いず、「俊子」で統一する。

(2) ここでは俊子の中国時代を前期と後期に分けて考えたい。

中国時代前期の軌跡について、1938年12月に上海に到着し、上海一帯の一ヶ月間余りの旅行を行い、1939年1月末に上海から青島、天津を回って、同年2月初め、北京に着いた。その後三年間ほど（1939年2月初め～1942年1月末）北京に滞在していた。1942年の初めに北京を離れて南京へと活動の場を移し、1942年5月に上海で中国語婦人雑誌『女聲』を創刊した。

中国時代後期は、上海で中国語婦人雑誌『女聲』を主宰し始めた1942年5月から、脳溢血により亡くなった1945年4月までの時期である。この時期の俊子は上海で雑誌『女聲』の編集にのみ力を注いだ。

(3) 黒澤亜里子「田村俊子」渡辺澄子（編）『女性文学を学ぶ人のために』世界思想社、2000年、107頁

(4) 岩淵宏子/北田幸恵（編）『はじめて学ぶ日本女性文学史【近現代編】』ミネルヴァ書房、2005年、58頁

(5) 渡辺澄子『今という時代の田村俊子－俊子新論』（『国文学解釈と鑑賞』別冊）至文堂、2005年、5頁

国時代について調査した。

管見の限り、次の4つの文献に俊子の年譜が記載されている。

①工藤美代子／スーザン・フィリップス『晚香坂の愛——田村俊子と鈴木悦』ドメス出版、1982年

②長谷川啓／黒澤亜里子（編）瀬戸内寂聴・小田切秀雄・草野心平（監修）『田村俊子作品集 第三巻』オリジン出版センター、1988年

③瀬戸内寂聴「田村俊子」『瀬戸内寂聴全集』新潮社、2001年

④小平麻衣子・内藤千珠子『21世紀日本文学ガイドブック⑦ 田村俊子』ひつじ書房、2014年。

現状の年譜では、俊子の中国時代について、補充や再検討をすべきところが多い。例えば、1941年と1944年は空白で、1940年は②のみに簡単な記述がある。1938年の部分については、日本から中国へ渡航する際の旅程に記載されている東京からの出発日12月6日には疑問が残る。田村俊子から丸岡秀子への手紙（丸岡秀子1977：216）によれば、12月7日が正しいと考えられる。また、1942年の部分について、北京から南京へ移動したのは2月と書かれているが、1月末という説<sup>6)</sup>は正しいと考えられる。『女聲』が創刊される時期について、③には10月と書かれているが、5月が正しいと考えられる。

調査の過程で、筆者は俊子が1940年に中国の雑誌・新聞に発表した中国語文章8篇を見つけた。下記の表一の通りである。この8篇はこれまで出版された田村俊子全集とその年譜には記載されていない<sup>7)</sup>。資料に関する情報はここで略して本文にゆずる。

(6) 黒澤亜里子／長谷川啓 [監修]「解題」『田村俊子全集第九巻』ゆまに書房、2017年、742頁、次の記述がある。「北京から南京まで」の連載が一月三〇日から始まっているため、北京を立ったのは一月末だったと考えられる。」

(7) (一)～(七)の文章については筆者が2019年7月に植民地文化学会で発表した<sup>8)</sup>が、その後で(八)の文章を見つけ、これら8篇の中国語翻刻と日訳を筆者の修士論文「田村(佐藤)俊子の上海・北京・南京時期(1938年12月～1942年5月)」(一橋大学言語社会研究科修士学位論文、2020年1月)の付録にまとめた。段毅琳「佐藤俊子の中国観(1938—1941)研究—来華早期の“距離”と“反思”」(『名作欣賞』、2019年)では中国時代における俊子の発表文章名、発表年月、発表先のリストに「以心伝心」、「陳璧君女士印象記」が記載されている。しかし、この論文でこの2篇については説明されていない。また、「以心伝心」の発表年月は1942年2月と書かれているが、実際は1940年6月である。発表先は「新命(南京)」と記されている。「晚清及民国時期期刊全文数据库(1833～1949)」というデータベースでは「新命(南京)」という名前でも、『新命月刊』が収録されており、この発表先も『新命月刊』のことであると考えられる。

表一：田村俊子の中国語文章8篇（1940年）

	(一)	(二)	(三)	(四)	(五)	(六)	(七)	(八)
タイトル	「陳璧君女士印象記」	「以心伝心」	「中国婦女衣服」	「日本婦女之衣服」	「東洋婦女之技術進歩」	「日本女子教育之普及」	「演現代劇之日本女優」	「就中日婦女提携而言」
発表時期	1940年 4月15日	1940年 6月20日	1940年 9月25日	1940年 9月28日	1940年 10月2日	1940年 10月19日	1940年 10月23日	1940年 10月10日
掲載誌	『華文大阪毎日』 第4巻第8期 第30～31頁	『新命月刊』 第2巻第2期 第101～102頁	『婦女新都会』 第123期	『婦女新都会』 第124期	『婦女新都会』 第125期	『婦女新都会』 第130期	『婦女新都会』 第131期	『新光雑誌』 第1巻第7期

上述の資料発掘は俊子の中国時代前期を研究する一つの理由である。もう一つは、俊子の中国時代前期、特に北京の三年間は、彼女が中国で展開することになる女性啓蒙活動を準備した重要な時期だと考える<sup>(8)</sup>からである。俊子の中国時代研究は彼女が創刊した雑誌『女聲』に集中しているが、しかし、俊子の中国時代前期を中心とした考察はわずかである。

今回は主に中国時代の俊子の文章がもっとも揃っている『田村俊子全集第9巻』（黒澤亜里子／長谷川啓 [監修]、ゆまに書房、2017年）に掲載された1939～1942年の作品24篇の精読及び新資料・表一が示す俊子の中国語文章8篇（1940年）により整理を行う。それと共に同時代人の回想や中国の新聞に出た俊子に関する記事も扱う。その中で中国時代前期における俊子の作品の創作年譜を付録に整理した。本稿が田村俊子の伝記研究の一助となれば幸いである。本年譜の作成について、不備があれば、御教示を賜りたい。なお、俊子の北京時代において、いかにして女性啓蒙活動を展開したのか、その経緯と動機に関して、表一の新資料を扱いながら別稿で論じる。

## 一、田村俊子資料に関する情報

表一の資料に関する情報を簡単に紹介する。

(一) と (二) は筆者が「晚清及民国時期期刊全文数拠庫（1833～1949）という中国のデータベースから見つけたものだ。(一)は一橋大学経済研究所資料室に紙版も所蔵され、(二)は中国国家図書館（北京）に『新命月刊』のマイクロフィルムも所蔵されている。

『婦女新都会』に発表された俊子の文章については、前山加奈子がその存在

(8) 詳細は別稿で論じる。

を示唆している。前山によれば、「中国でも俊子の文章は、『女聲』以外に天津の親日系の『婦女新都会』という新聞にも見ることができる」<sup>(9)</sup>。しかし、前山のその論文には俊子の文章名や、発表年月日、『婦女新都会』の所蔵など関連する情報が言及されていない。そこで、筆者が調査したところ、中国国家図書館で『婦女新都会』のマイクロフィルムから「残荷集」というコラムとして連載された5篇を見つけた。なお、(三)の『婦女新都会』第123期に掲載された「中国婦女衣服」という文章の末尾には「一一九期残荷葉之「葉」字為「集」之誤特此更正」(筆者訳：一一九期残荷葉の「葉」字は「集」であり、この間違いをここで訂正する)と書かれている。このことから、第119期にも「残荷集」として佐藤俊子という名前で掲載された文章があるはずだが、中国国家図書館版は落丁が多く、第119期が現存しない。早稲田大学中央図書館の所蔵版も中国国家図書館と同じであった。上海図書館、南京図書館など他の図書館にも当たったが、筆者の探し得た範囲では、見つけることができなかった。

また、『婦女新都会』は、1940年4月に北平(北京)で創刊された『新光雑誌』と姉妹関係だという<sup>(10)</sup>。一橋大学附属図書館に『新光雑誌』の復刻版(線装書局、2007年)が所蔵されており、その第1巻第7期(1940年10月10日)に俊子の中国語文章「就中日婦女提携而言」が掲載されている。

なお、周作人研究者の弘前学院大学の顧偉良教授が整理した「日本の各界人士による周作人あての書簡人名リスト(368名)」([www.hirogaku-u.ac.jp/pdf/list3.pdf](http://www.hirogaku-u.ac.jp/pdf/list3.pdf) 2020年9月15日確認)に佐藤俊子(田村俊子)の名前があることが確認できた。つまり、俊子から周作人あての書簡が存在するということである。筆者はその書簡を入手していないが、俊子の文章、書簡などが中国の新聞・雑誌などにまだ残っていることが推測できる。

## 二、田村俊子の年譜(中国時代前期：1938年12月～1942年5月)

### 【凡例】

判読できない文字は「□」で示した。また、[ ]内は稿者による注記である。

(9) 前山加奈子『『女聲』と関露』渡邊澄子(編)『今という時代の田村俊子-俊子新論「国文学解釈と鑑賞」別冊』至文堂、2005年、50頁

(10) 侯福志「婦女新都会画報」『劉雲若社会言情小説経眼録』上海遠東出版社、2016年、363頁

**1938年12月（54歳）**

- ①12月7日の朝、9時の汽車で東京駅を出発し、京都で一泊。8日朝の特急で京都を出発し、夜半に博多着、博多で一泊。9日、福岡から飛行機で上海の大場鎮飛行場に到着。
- ②12月9日～16日の間に「知識層の婦人に望む「日支婦人の新の親和」を書いた [推定]。
- ③12月18日に上海から南京へ移った。
- ④12月中下旬から1月中下旬の一月に中国中部の旅（南京、蕪湖、揚州、鎮江、蘇州、杭州、上海）。  
揚州、蘇州で婦人巡査に逢った。在住の日本人、知識層の支那婦人たちが参加した揚州での歓迎茶会は2時から夜の8時まで続いた。  
南京で語り合った婦人：梁文若をはじめとして、南京の市長高冠吾の夫人…揚州では県長の夫人、方陳玉培をはじめとして、教育局長、警察所長の夫人たち。  
また、南京では、第一、第三、第五、第八小学を参観した。  
鎮江の甘露寺、杭州の浄持寺 [浄慈寺]、蘇州の虎丘山、蕪湖へ行った。
- ⑤クリスマスの日 [12月25日] には蕪湖にある学校を観に行っただ。

**1939年（55歳）**

**1～2月**

- ①南京で越年。「未亡人と銃後婦人の協同」『婦人公論』1月1日発表
- ②1月23日に杭州に行った。浄持寺 [浄慈寺] の難民を訪問した。
- ③1月下旬、南京から再び上海へ行き、上海から青島、天津を回って、2月初め、北京に着いた。
- ④1月中下旬、上海で「知識層の婦人に望む 日支婦人の新の親和」を書いた [推定]。
- ⑤「上海に於ける支那の働く婦人」『婦人公論』2月1日発表
- ⑥1939年2月初め～3月、北京で「国民再組織と婦人の問題」を書いた [推定]。
- ⑦北京で興亜院連絡部員の武田に案内されて中国高級戯曲職業学校という俳優学校を参観した。翌日武田に伴われて梅蘭芳に次ぐ名優程硯秋の家を訪問した。訪問に行った時期と「北京通信 俳優学校と程硯秋」を書いたのは1939年2月初め～4月15日の間だ [推定]。
- ⑧一度大使館で催された国防婦人会に出席した。1939年2月初め～4月の間だ [推定]。

## 3月

## ①3月1日から蒙疆旅行（張家口、大同、包頭）

張家口：3月1日に北京報道課の紹介をもって張家口の特務機関へ行った。北京から張家口まで8時間で急行列車ではなかった。蒙疆地方の旅行券をもらって、指定された福栄旅館に泊まった。

翌日3月2日に張家口と張北の境界にあたる長城線に案内され、張家口からそこまで往復で4時間はかかった。帰る途中に萬全県の城内を一巡し、県庁に寄り、日本人の男女の小学生や見学する一隊（満州二世）に県庁で出会った。そして、山間の龍泉寺に寄った。

大同：晋北政府の若い最高顧問に会い、晋北政府の岩崎継生案内役となり雲崗の石佛寺へ伴われた。雪の道を大同に戻る。城内で上華嚴寺と下華嚴寺の木彫と壁画を見た。

大同の特務機関長の室を訪ね、蒙疆の誇る生産物中の王の一つである大同の石炭を自動車で見に行き、本部からの矢島騎兵曹長に案内されて永定苗の炭鉱に着き、稼働中の堅坑に入って見た。

疲労した身体でもう一日晋北ホテルの一室に閉居した翌日の朝、雪の降る大同をあとにして、包頭まで直行の汽車に乗った。

## ②1939年3月1日蒙疆旅行から帰ってから4月までの間、「婦人の大陸進出とその進歩性」を書いた〔推定〕。

## ③「知識層の婦人に望む 日支婦人の新の親和」『婦人公論』3月1日発表

## ④「支那の子供」『東京朝日新聞』3月4日～6日発表

## ⑤3月半ば過ぎ：宿泊先の六国飯店で田村総と会い、ホテル代の支払いを頼んだ。翌日「中国飯店」に移って、その後、東単哈達門大街の「韓記飯店」に移った。韓記飯店の俊子の部屋は立野信之、武田泰淳、奥野信太郎、丸岡秀子などの溜まり場になった。

## 4月

## ①「国民再組織と婦人の問題」『婦人公論』4月1日発表

## ②「北京通信 俳優学校と程硯秋」『東京日日新聞』4月8日～9日発表

## 5月

## ①「婦人の大陸進出とその進歩性」『婦人公論』5月1日発表

## ②5月20日、北京翠明荘にて「北京と北京人を語る座談会」

出席者：石川 順 大□東亜部副部長  
石原 巖徹 華北交通会社 旅□課宣伝主任  
石橋 丑雄 北京特別市公署 観光科専門委員  
牛島 吉郎 華北交通会社 北支開発□社嘱托  
城所 英一 華北交通会社 資料課弘報主任  
佐藤 俊子 作家  
佐藤 汎愛 華北交通会社嘱托  
中村 恵 華北交通会社資料課  
水野 薫  
村上 知行  
久米 正雄  
立上 秀二 『文藝春秋』社特派員

③北京時代に中国の婦人に中国語を教えてもらった。1939年2月初めから9月1日の間だ[推定]。そしてこの期間に天津へ行って、旅宿に泊まったことがある。

#### 6月

①「雪の京包線」『改造』と「婦人の歩む民族協和の道」『婦人公論』6月1日発表

②6月の初め、北京前門の遊郭へ行った。

#### 8月

①「新しき母性教育とは？」『婦人公論』8月1日発表

②「北京と北京人を語る座談会」『文藝春秋』8月10日発表

#### 9月

①「日本の婦人を嗤ふ支那の婦人」『婦人公論』9月1日発表

#### 12月

12月18日に上海に着いた。12月22日午後5時～6時に上海の汪精衛の邸宅で会見し、洪秀全について語った。

### 1940年（56歳）

#### 1月

①「茉莉花」『北支那』1月1日発表

②1月末に青島で開かれた青島会議に行きそこで汪精衛を見た[推定]。

**2月**

- ①「汪精衛氏と洪秀全を語る」『改造』2月1日発表
- ②2月29日に南京へ来た。

**3月**

- ①十日を過ぎて [3月10日] 上海へ来た。汪公館内で国民党の宣伝部長で、中華日報の林柏生に会う機会を得て話した。翌日 [3月11日] 三度汪公館で汪精衛秘書の周隆庠に会った。その翌日 [3月12日]、日本の名流婦人の組織する教育事業の会長会員の諸夫人たちと一緒に、陳璧君に会った。
- ②3月20日から中政会議のため、南京の首都飯店に行った。

**4月**

- ①「陳璧君女士印象記」[中国語]『華文大阪毎日』第4巻第8期 4月15日発表

**5月**

- ①「南京の感情」『改造』5月1日発表
- ②「汪精衛氏への贈物」『読売新聞』5月28日、29日、31日発表

**6月**

- ①「以心伝心」[中国語]『新命月刊』第2巻第2期 6月20日発表

**8月**

- ①夏に北京で「大陸通信一束」を書いた [推測]。中国婦人の間に新文化運動を起す計画があり、秋にもう一度南京へ行って帰るつもりであった。

**9月**

- ①秋、韓記飯店から北京飯店に移った。
- ②「中国婦女衣服」[中国語]『婦女新都会』第123期 9月25日発表
- ③「日本婦女之衣服」[中国語]『婦女新都会』第124期 9月28日発表

**10月**

- ①「東洋婦女之技術進歩」[中国語]『婦女新都会』第125期 10月2日発表
- ②「就中日婦女提携而言」[中国語]『新光雑誌』第1巻第7期 10月10日発表
- ③「日本女子教育之普及」[中国語]『婦女新都会』第130期 10月19日発表
- ④「演現代劇之日本女優」[中国語]『婦女新都会』第131期 10月23日発表

**1941年 (57歳)**

夏のある日、朝日新聞記者の夫人と一緒に北海公園に行き、そこで梨本祐平

の妻、娘〔川合継美〕等に会い、一緒に記念写真を撮った。

## 8月

①「変わった北京」『現地報告』8月10日発表

## 9月

①秋？ 西城鬮才胡同の平等俊成の家に移った。

②中秋の夜〔9月6日〕平等俊成家で田村総と月を賞でた。

③9月23日に「北京の秋を語る座談会」六国飯店に於いて

出席者：村上知行（著述業）

佐藤俊子（同） 張我軍（北京大学教授）

奥野信太郎（慶大文学部 講師）

一氏□良（華交社員）

山室三良（北京日本近代科学図書館館長）

清水安三（北京崇貞 学院長）

『満州日日新聞』伊藤北京市社長

④「北京の秋を語る座談会」『満州日日新聞』 9月26～28日、30日発表

⑤『満州日日新聞』の北京支社に訪ねたことがある。また、周作人、柳宗悦と会って骨董、陶器について話した。

⑥「支那趣味の魅力」『満州日日新聞』 9月30日、10月1～5日発表

## 1942年5月まで（58歳）

## 1月

①「北京から南京まで」『満州日日新聞』 1月30～31日、2月1日、3日発表

②1月末、北京から離れ、南京へ旅立った。

## 3月

3月18日午後4時～9時 中国婦女慈儉学会との座談会を行った。

## 5月

5月15日、上海で中国語婦人雑誌『女聲』創刊。

## 三、年譜の参考文献

日本語文献

■『田村俊子全集第9巻』(黒澤亜里子／長谷川啓 [監修]、ゆまに書房、2017年)に掲載された俊子の作品と「解題」。(『田村俊子全集第9巻』の頁数を示す。)

- ・佐藤俊子「上海に於ける支那の働く婦人」531頁
- ・黒澤亜里子「解題 中国時代」727頁
- ・佐藤俊子「知識層の婦人に望む 日支婦人の新の親和」536～539頁
- ・佐藤俊子「支那の子供 (一)」543頁、「支那の子供 (二)」544～545頁、「支那の子供 (三)」546頁
- ・佐藤俊子「中支で私の観た部分 (警備、治安、文化)」716頁、718頁
- ・佐藤俊子「北京通信 俳優学校と程硯秋 (一)」555頁、「北京通信 俳優学校と程硯秋 (四)」559頁
- ・佐藤俊子「婦人の大陸進出とその進歩性」566頁
- ・佐藤俊子「雪の京包線」567頁、570頁、571頁、573頁、574頁、576～577頁、580～583頁
- ・「北京と北京人を語る座談会」592～593頁
- ・佐藤俊子「日本の婦人を嗤ふ支那の婦人」612～614頁
- ・佐藤俊子「茉莉花」615～616頁
- ・佐藤俊子「汪精衛氏と洪秀全を語る」619頁
- ・佐藤俊子「南京の感情」629頁、633～636頁、640頁、
- ・佐藤俊子「大陸通信一束」652頁
- ・「北京の秋を語る座談会」657頁
- ・佐藤俊子「支那趣味の魅力 (五)」675頁、「支那趣味の魅力 (六)」677頁

■そのほか

- ・田村総『いきいき 老青春』学習研究社、1990年、71頁
- ・丸岡秀子『田村俊子とわたし』東京：ドメス出版、1977年、212～214頁、216頁
- ・川合継美『風の鳴る北京』同成社、1993年、63～64頁

中国語文献

- ・「婦女慈儉学会 昨開座談会 歡迎日女作家佐藤俊子」『中報』1942年3月19日第3版

・新資料：表一

【付録】表二：中国時代前期における俊子の作品創作の年譜

■「田村俊子の中国時代前期の作品（日本語）」（『田村俊子全集第9巻』、引用は新字体）						
NO.	発表時期	発表先	タイトル	創作時期	根拠	創作場所
1	1939年 1月1日	『婦人公論』	「未亡人と銃後 婦人の協同」			
2	1939年 1月8日	『週刊朝日』	「お雪さん」	1938年	お雪帰国は1938年3～4月	
3	1939年 2月1日	『婦人公論』	「上海に於ける 支那の働く婦 人」	1938年 12月9日～ 12月16日 の間	「大場鎮の新飛行場に降りて上海の空気を吸ってからまだ一週間にも満たないのである。」531頁 上海に着いた日：12月9日	上海
4	1939年 3月1日	『婦人公論』	「知識層の婦人 に望む「日支 婦人の新の親 和」	1939年 1月中下旬	「前月號に『上海における支那の働く婦人』を書いてから、約一ヶ月を過ぎている。この間私は南京へ行き、蕪湖、揚州、鎮江、蘇州、杭州を歩いて、再び上海へ戻って来たのであるが、中支の旅はこれで一通りを終り、これから北支の旅へと立つのである。」536頁	上海
5	1939年 3月4日 ～6日	『東京朝日新聞』	「支那の子供」	1938年 12月中旬から 1939年3月 6日までの間	南京、杭州、揚州、蕪湖に旅行したことを描いた。	
6	1939年 3月20日	『塔影』	「寸感」			
7	1939年 4月1日	『婦人公論』	「国民再組織と 婦人の問題」	1939年 2月初め ～3月	「本誌特派 在北京」550頁、2月初めに北京到着	北京
8	1939年 4月8日～ 9日、13～ 15日	『東京日日新聞』	「北京通信 伊 優学校と程硯 秋」	1939年 2月初め～ 4月15日 の間	「北京通信」	北京
9	1939年5 月1日	『婦人公論』	「婦人の大陸進 出とその進歩 性」	1939年 3月1日蒙疆 旅行から帰っ てから4月ま での間	「本誌特派 在北京」563頁	北京
12	1939年8 月1日	『婦人公論』	「新しき母性教 育とは？」		「本誌特派 在北京」588頁	北京
13	1939年8 月10日	『文藝春秋』	「北京と北京人 を語る座談会」	1939年5月 20日	「五月二十日 北京翠明荘にて」593頁	北京
14	1939年 9月1日	『婦人公論』	「日本の婦人を 嗤ふ支那の婦 人」		「本誌特派 在北京」612頁	北京
15	1940年 1月1日	『北支那』	「茉莉花」	1939年6月	「前門の遊郭へ、…恰度六月の初めであった。」615頁	北京
16	1940年 2月1日	『改造』	「汪精衛氏と洪 秀全を語る」	1939年12月 22日	1939年12月18日上海着。 「在上海」618頁 「十二月の二十二日、夕方の五時が汪精衛氏に会ふ約束の時間であった。上海へ来てから今日で五日目である。」619頁	上海

17	1940年 5月1日	『改造』	「南京の感情」		「中政会議前 南京市街」629頁 「上海の汪公館」633頁 「中政会議 首都飯店」636頁（南京）	上海と 南京
18	1940年 5月28日、 29日、31日	『読売新聞』	「汪精衛氏への 贈物」		「上」 「中」「下」:「在南京」648頁、650頁	南京
19	1940年 9月1日	『女性展望』	「大陸通信一束」		「北京 佐藤俊子」652頁	北京
20	1941年 8月10日	『現地報告』	「変わった北京」		「在北京」653頁	北京
21	1941年 9月26～ 28日、30日	『満州日日新聞』	「北京の秋を語 る座談会」	1941年 9月23日	「九月二十三日 六国飯店に於いて」 657頁	北京
22	1941年 9月30日、 10月1 ～5日	『満州日日新聞』	「支那趣味の魅 力」			北京
23	1942年 1月30～ 31日、2月 1日、3日	『満州日日新聞』	「北京から南京 まで」			
24	未発表原稿		「中支で私の観 た部分（警備、 治安、文化）」	1939年 2月12日。	「北京。二、一二、」721頁 1939年1月の見聞に基づいたもの。	北京

#### ■中国語文章8篇（1940年）

NO.	発表時期	発表先	タイトル	創作時期	根拠	創作場所
1	1940年 4月15日	『華文大阪毎日』	「陳璧君女士印 象記」	1940年 3月12日	「南京の感情」『田村俊子全集第9巻』629 ～635頁の内容である。「私が南京へ来 た日、二月の二十九日は南京は大雪で あった」（629頁）、「十日を過ぎて上海 へ来た」（633頁）、「一日を越えて、三 度汪公館で汪精衛氏秘書の周隆庠氏に 会ふ」（634頁）、「思ひがけなく、会ひ たいと思った陳璧君女史に会ふことが できたのは其の翌日であった。日本の名 流婦人の組織する教育事業の会長会員 の諸夫人たちと一緒にであった」（635頁）	上海
2	1940年 6月20日	『新命月刊』	「以心伝心」	1940年 5月～6月 の間	文章の内容は1940年5月に汪偽国民政府 の答礼使節団の訪日についてのこと。 文中の前文に、俊子が北平に滞在して いると記載されている。	北京
3	1940年 9月25日	『婦女新都会』	「中国婦女衣服」	1940年6月 ～9月の間	俊子は北京滞在（1939年2月初め～ 1942年1月末）中の1939年12月から、 上海、南京取材の旅をしており、そこ から北京に戻った時期は確定できない が、1940年6月に既に北京にいた。その 後、1942年1月まで北京に滞在していた。	北京
4	1940年 9月28日	『婦女新都会』	「日本婦女之衣 服」	[推測]		北京
5	1940年 10月2日	『婦女新都会』	「東洋婦女之技 術進歩」			北京
6	1940年 10月19日	『婦女新都会』	「日本女子教育 之普及」	1940年6月 ～10月の間		北京
7	1940年10 月23日	『婦女新都会』	「演現代劇之日 本女優」	[推測]		北京
8	1940年10 月10日	『新光雑誌』	「就中日婦女提 携而言」			北京